

異郷の地での強制労働

新潟県 関 口 謙 治

昭和二十年九月十四日、忘れもしない、入ソした日である。武装解除してから一か月、そろそろ帰国と思っていたとき、牡丹江の収容所に、タイヤが十二本もあるアメリカ製のソ連軍用車が十数台も到着した。

自動機関銃を手にしたソ連の兵士に乗車を命ぜられ、ホロを降ろしたままの暗い貨物自動車の荷台にギッシリ詰め込まれた。夜にかけてどことなく行き先も知らされず、車は出発した。随分長時間の自動車の旅、外は全く見えない。やがて自動車がとまると、下車の指示があり、降りて見て驚いた。意外にもソ連領であった。

付近には建物の影は全くなく、見渡す限りの大平原である。この日が我が人生にとって初めて見るソ連、そして抑留の第一歩であった。

早速、ソ連軍の将校が、日本人通訳に向かって「便所

をつくれ」と命令した。何のことかサッパリわからず困惑したが、とにかく命ぜられるままに、スコップで幅三十センチほどのミゾを数か所掘った。野天のトイレである。

次に、またまた命令がきた。「急いで自分たちの住いをつくれ」。一体どうしたことが、何にもない原っぱにいきなり住いをつくれとは何事か。怒るよりあきれてしまい、返す言葉すらない。建築資材も一つもなく、大工道具一丁もない。徒手空拳とはこういうときに使う言葉か。

山田軍曹が言った。「とにかく附近から支柱になる木をみんなで探し、枝を支柱に縛りつけて、後は附近の枯れ草を上から覆えば何とか雨露は防げる」さすがだ。野宿よりましだ、日暮れも近い。

とにかく各班ごとにそれぞれ掘立小屋、いや草小屋が何とかできた。窓もない、中は真っ暗。隣の人の顔すらわからない。熊か鬼か、いやイワシの缶詰だ。

朝、草小屋を抜け出ると、また命令がきた。「今日から我が中隊はこの草原で草刈り作業を行う」中隊長の言葉

に、みなぼう然とした。近くには自動小銃で武装したソ連兵士がこちらに銃口を向けている。強制労働だ。だれとなく皆んなに伝わった。文句を言う者もいなかった。

いつの間にか、ロシア製の火鐮が用意されていた。各班ごとに鐮を一人一人が受け取り、草刈り作業が始まった。作業は簡単だった。草を刈るだけ。後は天日に乾かし乾燥すると、トラクターが一か所に集めるのである。

ところがである。なれるに従ってノルマが課せられる。鐮も切れなくなる。疲れる。何しろ朝晩おかげで、昼はパン一切れ、次第にみなが疲れていった。病人も出る。病気になるっても草小屋で休むだけ。だれの看病もない。水もない。薬等もちろん皆無だ。

とうとう若い岡田君が、空腹に耐えかねて毒草を食べ下痢を起こし、栄養失調になってしまった。二、三日で亡くなった。お父さん、お母さんと叫んで死んだと友人から聞いて、涙が出た。みんなで土を掘り、埋葬した。野花を一輪捧げるだけの極限状態であった。

秋、草刈り作業が終わると、次は町に移動した。身の回りの品等ほとんどなく、身一つの移動は簡単だ。ここ

での作業は、かつて我々が満州で暮らしたとき使った家具から日用品が、戦利品として続々運ばれてくる。その品々の運搬だ。よくもまあ、こんな物と思うほど、根こそぎ満州から運ばれて来るのには驚いた。独ソ戦のキズあとの深さがようやくわかってきた。

冬が来た。零下四十度以下になるシベリアだ。川も凍って、戦車さえ渡れるようになる寒さだ。幸い、このとき、石炭工場に移動した。民間のアパートを改良しての住まいで、暖房もあった。寒くないのが助かった。しかし、自動小銃を持ったソ連軍の監視は相変わらず厳しかった。

石炭工場の仕事は、原石の運搬と、石炭の貨車の積み込みである。貨車が入ると、石炭炉から石炭を取り出して貨車に積み込む。限られた時間内にいっぱい積み込むのは大変だ。休憩もなく、数時間はかかる。特に夜間作業が多い。

時々、ロシア人の監督が来て、「ダバイダバイ」とせき立てる。病気で休むと、宿舎まで迎えに来る。本当にきつい作業だった。腹もへった。ロシア人の畑からコッソ

リじゃが芋を失敬して、鍋で煮て飢えをしのいだ。近所の人のいいロシア人が、時々、パン屑やトマト等持参してくれたこともあった。個人的には実によい人ばかりだのに。

夜になると食べ物の話ばかり、アベカワが食べたい、せめて干飯を腹いっぱい食べたい等。そういえば、入ソ以来三度、砂糖の配給はあったが、菓子是一回も食べていない。路上に転がるれんがが黒パンに見えて拾いそうになったことが何度かあった。ああ、早く日本に帰りた。そして腹いっぱい食べたい。こんな小さな望みしか我々にはなかったのだ。

私の抑留体験記

新潟県 宮田 佐一郎

我々の部隊は、ソ連の参戦が予想されるや、急速、北支から満州に転進し、対ソ戦車戦闘訓練に明け暮れていたが、ソ連の侵攻が近づくや、奉天防衛のために奉天東

北方の台地に陣地構築中、突如終戦となった。部隊は早速終結して、奉天郊外に引き上げ、幕舎生活をして、ソ連軍の武装解除を受けた。

これまでは、命令一下、一糸乱れずすべてのことが運ばれて来たが、これから一体どうなるか、今や精神の支えもなく、急に命が惜しくなり、だれしもが内地の家族が恋しく、一日も早く帰りたいと願うのみであった。

現地の中国人（満州人）たちは、掌をかえたように、積年の恨みを一挙にはらさんと、日本人に暴行を加えたり、日本の建物を打ち壊したり、倉庫を襲撃して食糧や物資を持ち去ったり、目も当てられないありさまであった。

こんなとき、当然デマ宣伝が流れる。日本兵は全部ソ連領シベリアへ連行されて殺されるか、生涯労働に従事させられる等々、兵たちの不安は尽きない。市街へ使役に出た兵が逃亡した。彼は若干中国語ができることもあって、中国に永住する覚悟らしかった。食物も急にコーリヤン飯に変わった。精白してあったが、まずくて食べられない。